

2017年度茨城県立医療大学認知度等調査報告

佐藤 純¹⁾， 萬代 望¹⁾， 角 友起²⁾， 中島修一³⁾， 塚本和己⁴⁾， 川野道宏⁵⁾， 滝澤恵美⁶⁾， 真田育依⁷⁾

- 1) 茨城県立医療大学 人間科学センター
 2) 茨城県立医療大学 医科学センター
 3) 茨城県立医療大学 放射線技術科学科
 4) ブルカージャパン株式会社 ナノ表面計測事業部
 5) 茨城県立医療大学 看護学科
 6) 茨城県立医療大学 理学療法学科
 7) 茨城県立医療大学 作業療法学科

要旨

【目的】本研究は、茨城県立医療大学（以下、本学）が茨城県内の小学生、中学生、高校生および一般県民にどのように認知されているかを調査することを目的とする。

【対象】茨城県在住の小学生、中学生、高校生、計769名ならびに、一般成人2,000名から調査協力を得た。

【方法】本学および本学付属病院の認知度、医療専門職種に関する知識、本学の入学難易度および授業料に対するイメージについて、アンケート調査を行った。

【結論】①茨城県全域における本学の認知度は、高校生以外の学校種および年代において低かった。②本学付属病院の認知度は県南地域では高いが、それ以外では高くなかった。③本学で養成している医療専門職種のうち、看護師と助産師は仕事の内容を半数以上が知っていたが、それ以外の職種は知らない人の方が多かった。④本学を知る人の多くは、本学の難易度や授業料について正しく理解していたが、授業料を高く認知している人も少なくなかった。

キーワード：茨城県立医療大学，認知度，アンケート調査，茨城県民，医療専門職

1. はじめに

本研究の目的は、茨城県立医療大学（以下、本学）が茨城県内の小学生、中学生、高校生および一般県民にどのように認知されているかを調査することである。

本学の認知度については、これまでに塚本他¹⁾が本学から10km圏内にある中学校の2学年生徒を対象に調査を行い、本学から1km圏内の中学生においては約9割が本学の存在を認知していたが、10km離れた中学生になると約5割となることを明

らかにした。さらに各学科の認知度は、最も高い看護学科で21.6%、最も低い作業療法学科では2.9%であった。大学から10km圏内に存在する中学校においてそのような結果であるならば、茨城県南以外の地域ではさらに低い値を示す可能性も考えられる。しかしながら、これまで本学の認知度について体系的な調査が実施されたことはない。18歳人口の減少が進み受験生確保が大学の課題となっているほか、高齢化も急速に進行し医療専門職種の需要がますます高まっている現在、医療専門職種の養成を担う本学の方向性を見定めるためにも、県内の児童

生徒のみならず一般県民を対象とした認知度や医療職種の知識に関する調査が必要である。

そこで、本研究では茨城県全域を対象とし、茨城県立医療大学の認知度および医療専門職種の知識保有に関してアンケート調査を実施し、現状を明らかにする。

2. 対象と方法

本研究は、2通りの対象と方法によって行った。それぞれを調査1および調査2とした。

2-1 調査1

(1) 調査協力者

調査協力者は、茨城県内の小学5年生221名（男子104名，女子108名，その他（性別について「答えたくない」を選択した人。以下，同じ）9名：県南2校，鹿行1校，県西1校），中学2年生194名（男子73名，女子97名，その他24名：県央1校，鹿行1校），高校2年生354名（男子156名，女子181名，その他17名：県北1校，県央1校，県南2校）の計769名（男子333名，女子386名，その他50名）の児童生徒であった。調査協力者の地域と学校種の内訳を表1に示す。

表1 調査1における学校種・地域ごとの調査対象者数（人）

	県北	鹿行	県央	県西	県南	計
小学生		53		77	91	221
中学生		50	144			194
高校生	80		78		196	354
計	80	103	222	77	287	769

(2) 調査方法

県内5地域（県北，県央，県南，鹿行，県西）の計23校（小学校8校，中学校5校，高等学校10校）に郵送にて依頼状および質問紙のサンプルを送付し，承諾の返信のあった学校に対して，研究の趣旨と方法について説明を行った。送付先の学校の選定は，各地域において同程度の規模の学校となることを基準に行った。具体的な選定の手続きは以下の通りである。まず，上記5地域の中から大学進学率の高い県立高等学校とそれほど高くない県立高等学校の両方が所在する市を抽出するとともに，それら両方の高等学校を選出した。茨城県内市町村等教育委員会の学校データに基づき，抽出した各市にある公立小学校の中から学年に2クラス以上ある小学校を

複数選び，その中から同一中学校区にある小学校2校と中学校1校を選出した。また，小学5年生，中学2年生，高校2年生を対象にした理由は，中学2年生及び高校2年生についてはそれらの学年でキャリア教育が盛んに行われ，かつ受験生でないためであり，小学5年生については高学年向けのキャリア教育が始まる学年であることに加え，中学2年生と高校2年生の学年差と等間隔になるようにするためである。

最終的に承諾が得られたのは10校（承諾率：43.5%）で，小学校では4校（同50.0%），中学校2校（同40.0%），高等学校2校（同20.0%）であった。それらの学校に対して，質問紙調査の実施方法について書かれた説明用紙と質問紙を郵送した。また，承諾が得られた高等学校はいずれも大学進学率の高い高等学校であった。

質問紙調査の実施は，担任教員等に依頼し，回収を終えた質問紙はまとめて返送してもらった。なお，調査の実施に際しては，「本アンケートは，茨城県内の大学について，皆さんが抱えている意識を調査することを目的としています。この調査の結果は，個人が特定されないような形で統計処理がなされた上で，学会等で発表されることがあります。本研究の趣旨にご同意いただける方は，ご回答をお願いします。」という文章を，各年齢段階に応じた表現に適宜修正してもらった上で，説明してもらった。

調査は，2017年11月～12月の期間に実施した。

(3) 調査内容

①茨城県内の大学の認知（5校）：「あなたが知っている茨城県内にある大学を思いついた順に5校まで書いてください」という質問に対して，5校分の回答欄を設け，自由記載にて回答を求めた。なお，質問紙のフェイスシートには大学名は示さず，アンケートの最終ページに大学名と研究実施者名を示した。この点については，実施校および実施担当教員にも説明済みであり，アンケート実施後に児童生徒に説明するよう依頼し，了承済みであった。

②本学の存在の認知：「茨城県立医療大学という大学があることを知っていましたか」という問いに対して，「知っていた」「知らなかった」の二者択一で回答を求めた。なお，この項目は，①の項目の次のページに記載されており，前のページに戻って回答

しないよう説明が加えられている。

③付属病院の認知（②で本学を知っていた人のみを対象）：「茨城県立医療大学には、付属病院があることを知っていますか」という問いに対して、「知っている」「知らない」の二者択一で回答を求めた。

④医療専門職の知識：医師，看護師，保健師，助産師，理学療法士，作業療法士，言語聴覚士，診療放射線技師，臨床検査技師，臨床工学技士，歯科医師，歯科衛生士，歯科技工士，薬剤師という14種類の医療専門職について、「聞いたことがある」「聞いたことがあり，中身も知っている」「聞いたことが無い」の3段階で回答を求めた。

⑤本学で養成している医療専門職の認知：④で示した14種類の医療専門職の中で，本学がどの専門職につくための大学だと思うかについて，複数回答可で回答を求めた。

⑥本学の入試難易度のイメージ：「茨城県立医療大学に入学するのは，どれくらい難しいと思いますか」という問いに対して，「難しい」「やや難しい」「ふつう」「やや簡単」「簡単」の5段階で回答を求めた。

⑦本学の授業料のイメージ：「茨城県立医療大学の1年間の授業料は，およそいくらだと思いますか」という問いに対して，「0円（無料）」「～50万円」「～100万円」「～150万円」「～200万円」の5段階で回答を求めた。

(4) 倫理的配慮

本研究は茨城県立医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号：e115）。

2-2 調査2

(1) 調査協力者

調査協力者は，茨城県在住で株式会社クロス・マーケティングの調査モニターとして登録している一般成人2000名（男性1140名，女性860名：年齢20歳～79歳）であった。調査協力者の地域と年代の内訳を表2に示す。

表2 調査2における年代・地域ごとの調査対象者数（人）

	県北	鹿行	県央	県西	県南	計
20代	31	14	38	11	73	167
30代	71	35	87	51	122	366
40代	115	46	121	85	125	492
50代	91	40	102	76	126	435
60代	77	37	84	64	113	375
70代	46	6	31	15	67	165
計	431	178	463	302	626	2000

(2) 調査方法

調査は，株式会社クロス・マーケティングの調査モニターを対象に，地域（茨城県5地域）・性別・年齢（10歳区切り）の層化無作為抽出によるWebアンケート形式で，2017年12月15日～18日までの期間に実施した。

(3) 調査内容

調査1と同様であった。

(4) 倫理的配慮

本研究は茨城県立医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号：e114）。

3. 結果

3-1 本学の存在の認知度

はじめに，「茨城県立医療大学という大学があることを知っていましたか」という設問に対する結果を図1に示した。まず，県全域の結果については，高校生のみ72.3%と高い値を示したが，他の学校種及び年代では全て50%を下回っていた。特に，小学生と中学生においては20%以下であった。成人においては50代および60代でやや高い値を示していた。また，県南地域とその他の地域の結果を比較すると，小学生と20代，40代，50代，60代では県南地域の認知度が高かったものの，高校生，30代，70代では県南地域において値が低く，必ずしも県南地域での認知度が高くはなかった。

次に，茨城県内にある大学を思いついた順に5校まで記載を求め，本学が記載された割合を示したのが図2である。先の項目が，本学の存在を提示された上での認知度を問うたのに対し，この項目は，茨城県内の大学として本学が自発的に想起された割合を問うている点で異なっている。結果を見ると，やはり高校生の認知度が最も高かった点は図1に示した結果と同様であった。しかし，その値は県全域で40.7%と大きく低下した。その他の学校種及び年代においては，全て10%を下回っていた。県南地域とそれ以外の地域の比較では，小学生と20代，40代，50代，70代で県南地域の認知度が高かったが，高校生，30代，60代ではそのような傾向は認められなかった。

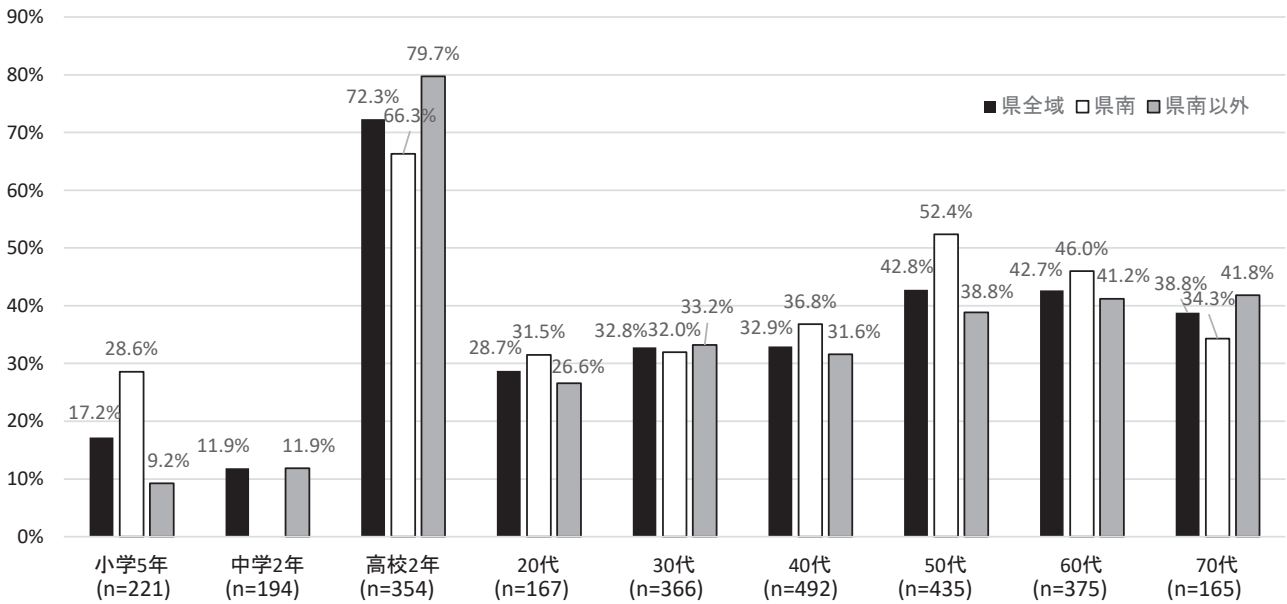


図1 本学の認知度 (本学を知っているかという問への回答率)

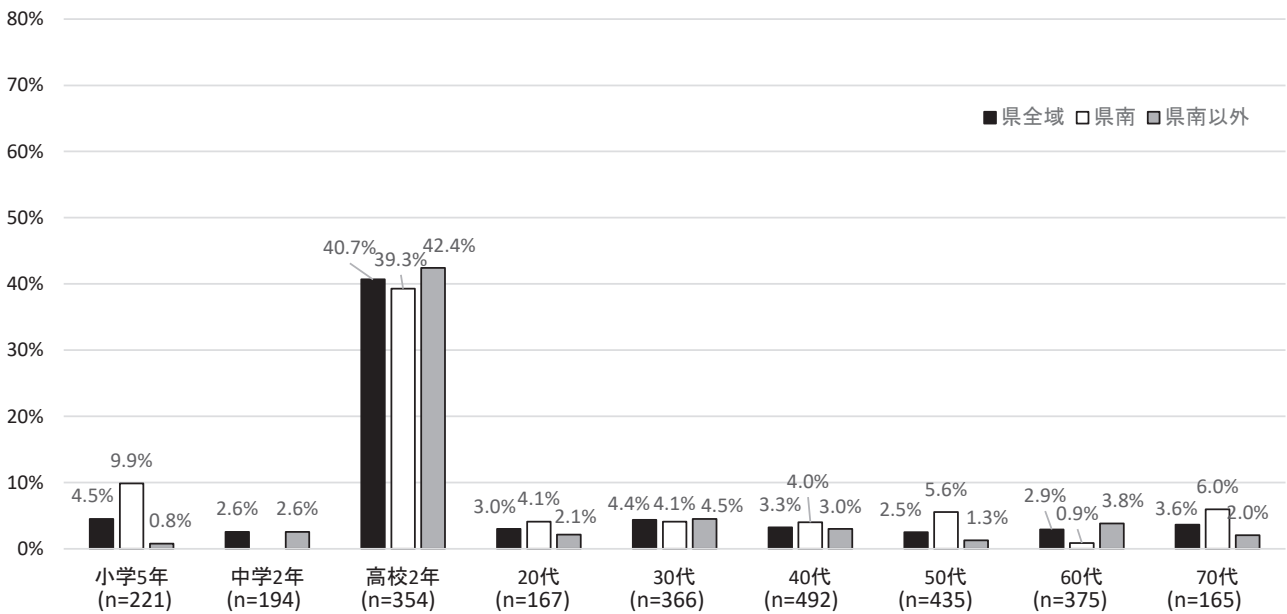


図2 本学の認知度 (県内大学5校の記事を求める問への回答率)

さらに、茨城県内の大学5校として記載された大学の割合を示したのが図3である。各大学が5校のうちの1校として記載された件数を、総記載件数で除した値を記載率とした。その結果、県全域では茨城大学が31.8%と最も記載率が高く、筑波大学が27.8%、常磐大学が12.6%、茨城キリスト教大学が10.6%と続き、そして本学が9.7%という結果であった。県南地域のみを示したのが図4である。こちらも茨城大学が30.6%、筑波大学が29.4%と続く点は県全域と同様であるが、県南地域では本学は14.4%と第3位であった。県南以外の地域では (図

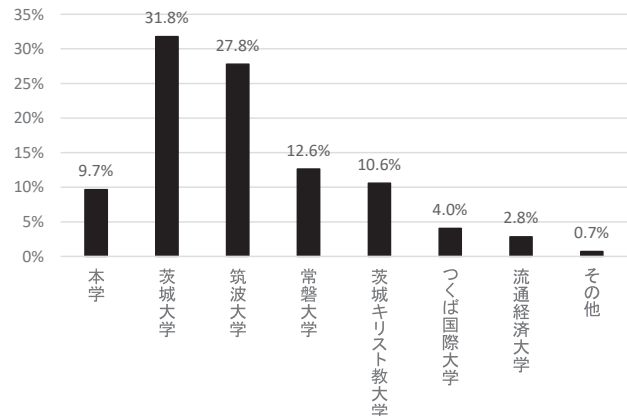


図3 県内大学5校の記事を求める問への回答 (県全域)

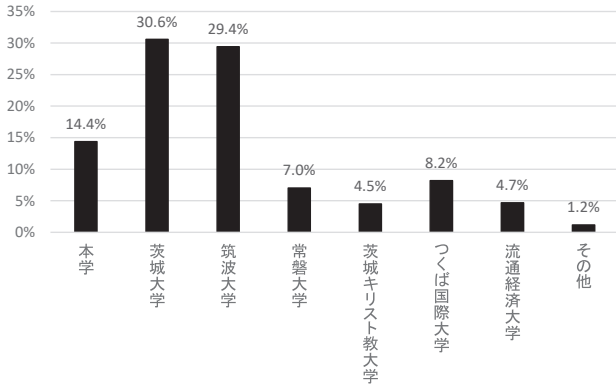


図4 県内大学5校の記載を求める問への回答 (県南のみ)

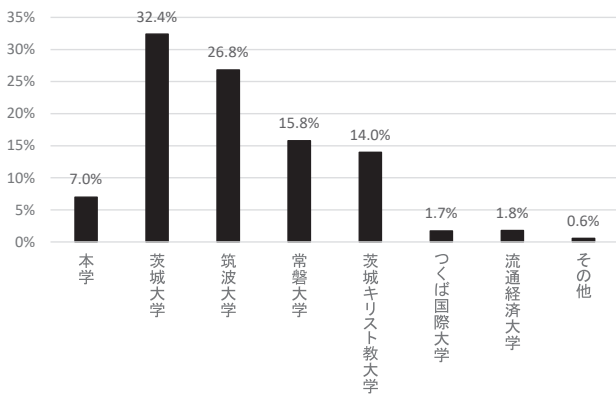


図5 県内大学5校の記載を求める問への回答 (県南以外)

5参照), 県全域と同様の傾向を示し, 本学の記載率は7.0%であった。

3-2 付属病院の認知

本学の大きな特色の一つに, 付属病院の存在がある。医学部のない医療系大学で付属病院を持つ大学は少なく, 付属病院を持つことは, 教育, 臨床, 研究の点で, 大学および付属病院の両者にとって極めて有益に機能している。本学にそのような「付属病院があることを知っていますか」という項目に対する結果を図6に示した。県全域の結果を見ると, 付属病院の存在の認知度は最も高い20代で56.3%, 最も低い中学生において34.8%で, 多くは40%台の認知度であった。県南地域では20代と40代では60.9%と高く, 最も低い高校生でも42.1%であった。しかし, 県南以外の地域では20代と30代では40%を超えているが, その他の学校種及び年代では30%台以下であった。

3-3 医療専門職種の知識

14種類の医療専門職(国家資格)について知っているかどうかを尋ねた結果が, 表3である。数値は, 理解の度合いは問わず, 示された職種名を知っていると回答した割合を示している。医師, 看護師,

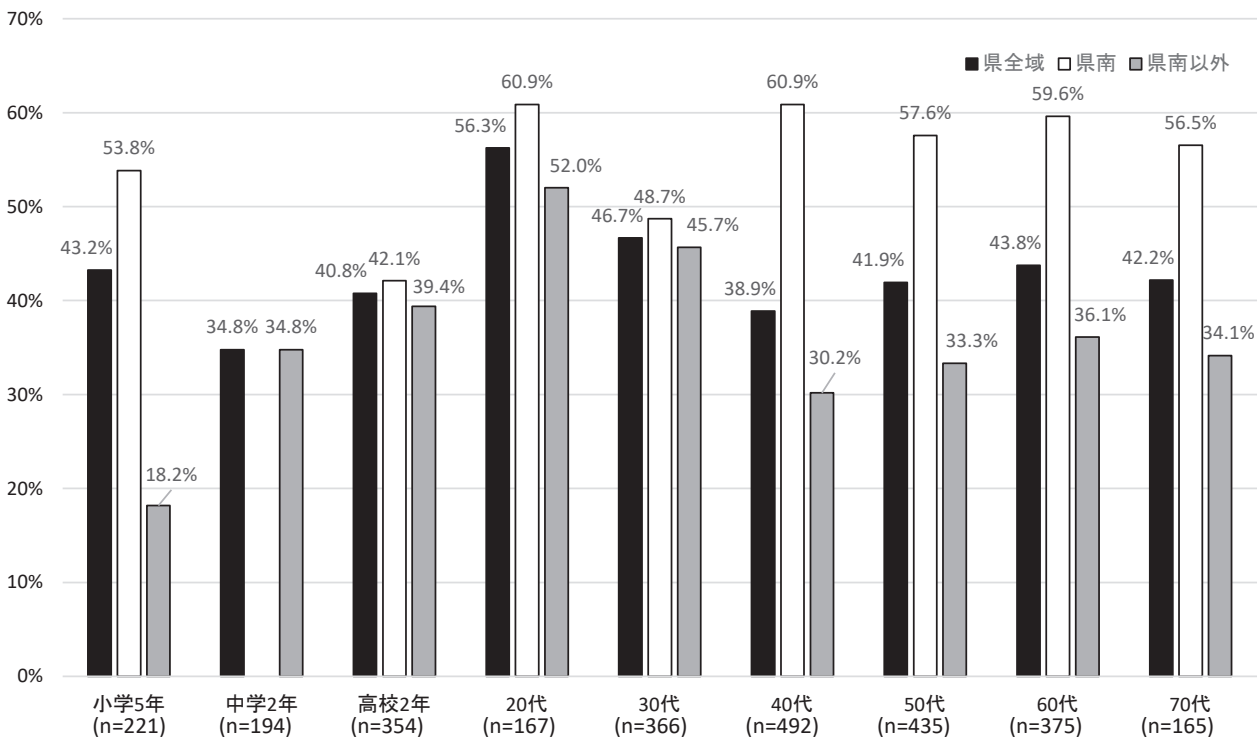


図6 付属病院の認知度 (本学付属病院を知っているかという問への回答率)

表3 医療専門職種についての知識保有率（知っているか）

	n	医師	看護師	保健師	助産師	理学療法士	作業療法士	診療放射線技師
小学5年	221	96.4%	95.9%	78.7%	76.9%	57.5%	42.5%	47.5%
中学2年	194	96.9%	96.9%	83.5%	90.2%	65.5%	55.7%	61.9%
高校2年	354	97.7%	97.2%	90.7%	95.8%	93.8%	88.4%	90.4%
20代	167	97.0%	95.8%	82.6%	93.4%	88.0%	74.3%	82.6%
30代	366	97.0%	95.6%	81.7%	94.0%	87.4%	73.2%	86.3%
40代	492	98.2%	97.4%	84.1%	96.5%	91.7%	69.1%	95.5%
50代	435	97.0%	97.7%	86.7%	96.1%	89.2%	67.6%	94.5%
60代	375	97.3%	97.1%	90.1%	94.9%	89.3%	65.1%	94.1%
70代	165	98.8%	97.6%	92.1%	97.0%	92.1%	68.5%	97.0%
全体	2769	97.4%	96.9%	85.8%	93.6%	85.9%	68.5%	86.4%

	n	言語聴覚士	臨床検査技師	臨床工学技士	歯科医師	歯科衛生士	歯科技工士	薬剤師
小学5年	221	39.4%	35.7%	32.6%	86.4%	64.7%	48.9%	88.2%
中学2年	194	52.6%	54.1%	47.9%	95.9%	85.1%	67.0%	93.3%
高校2年	354	74.6%	79.9%	68.4%	96.0%	90.1%	77.7%	96.0%
20代	167	62.3%	73.7%	59.3%	95.8%	88.6%	79.6%	95.8%
30代	366	56.6%	78.1%	54.1%	95.1%	89.1%	88.0%	95.6%
40代	492	55.7%	83.1%	56.1%	97.2%	93.9%	94.3%	97.2%
50代	435	50.3%	82.3%	52.6%	96.6%	90.6%	95.2%	96.6%
60代	375	52.5%	83.7%	51.5%	96.3%	88.8%	94.4%	96.3%
70代	165	55.8%	87.3%	58.2%	98.2%	87.9%	97.0%	98.2%
全体	2769	55.8%	75.9%	54.1%	95.6%	87.9%	85.2%	95.6%

保健師、助産師、理学療法士、診療放射線技師、歯科医師、歯科衛生士、薬剤師については、高校生から20代以上のおよそ80%以上が知っているという回答していたが、作業療法士、言語聴覚士、臨床検査技師、臨床工学技士、歯科技工士については、それらよりも知識の保有率が低いことが示された。また、学校種及び年代の違いを見ると、理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、言語聴覚士、臨床検査技師、臨床工学技士は、中学生から高校生にかけて

20%以上も知識保有率が増加していることが示された。

続いて、職種の名前を知っているだけでなく、その仕事の中身も知っているかどうかを尋ねた結果を、表4に示した。その結果、高校生から20代以上の知識保有率が5割を超えていたのは、医師、看護師、助産師、歯科医師、薬剤師であり、それ以外は全て5割を下回っていた。本学で養成している、保健師、理学療法士、作業療法士、診療放射線技師に

表4 医療専門職種についての知識保有率（職業の中身を知っているか）

	n	医師	看護師	保健師	助産師	理学療法士	作業療法士	診療放射線技師
小学5年	221	61.5%	64.7%	29.0%	52.0%	17.6%	11.3%	16.7%
中学2年	194	68.6%	68.6%	24.7%	56.2%	19.1%	18.6%	24.7%
高校2年	354	76.0%	74.0%	27.4%	72.6%	34.5%	32.5%	44.1%
20代	167	60.5%	56.3%	24.6%	55.1%	24.6%	22.8%	32.3%
30代	366	58.2%	59.0%	29.5%	55.2%	26.2%	24.0%	35.2%
40代	492	68.1%	64.6%	34.8%	62.6%	32.3%	24.2%	53.3%
50代	435	68.0%	67.8%	38.2%	64.4%	37.9%	29.4%	55.4%
60代	375	65.1%	64.0%	45.6%	61.1%	38.9%	26.4%	58.7%
70代	165	72.7%	71.5%	53.9%	69.7%	47.3%	25.5%	66.7%
全体	2769	66.7%	65.7%	34.5%	61.6%	31.9%	24.9%	45.4%

	n	言語聴覚士	臨床検査技師	臨床工学技士	歯科医師	歯科衛生士	歯科技工士	薬剤師
小学5年	221	14.0%	14.5%	14.0%	51.6%	30.3%	17.6%	53.8%
中学2年	194	17.5%	13.9%	13.9%	62.4%	40.2%	22.7%	59.8%
高校2年	354	22.9%	23.2%	13.3%	67.2%	39.0%	24.9%	69.8%
20代	167	18.0%	21.0%	12.0%	50.3%	32.3%	25.7%	55.7%
30代	366	17.8%	21.9%	14.8%	54.9%	39.3%	35.8%	57.1%
40代	492	18.5%	26.4%	14.0%	63.6%	48.4%	52.8%	64.4%
50代	435	21.4%	33.8%	14.0%	66.9%	47.4%	60.5%	66.7%
60代	375	20.3%	37.3%	12.8%	63.7%	45.9%	58.4%	62.9%
70代	165	18.2%	41.8%	17.6%	71.5%	52.1%	68.5%	69.7%
全体	2769	19.2%	26.8%	13.9%	62.1%	42.7%	43.3%	62.9%

についても、高校生段階での知識保有率は高くはないことが明らかとなった。

3-4 本学の養成職種の認知

3-3で尋ねた14種類の医療専門職の中で、本学はどの医療専門職につくための大学だと思うかについて尋ねた結果を表5に示した。複数回答可としているため、それぞれの職種において最高の値は100%と成りうる。まず、大学の進学に最も関心が高いと考えられる高校生の結果では、最も養成職種として認知されていたのは看護師で82.8%であった。2番目以降は、順に理学療法士(72.0%)、医師(68.4%)、作業療法士(60.5%)、診療放射線技師(59.9%)、保健師(55.1%)、助産師(54.2%)、薬剤師(47.2%)、臨床検査技師(45.2%)、歯科医師(40.1%)、歯科衛生士(35.0%)、臨床工学技士(31.6%)、言語聴覚士(29.7%)、歯科技工士(27.7%)という結果であった。小学生以外の年代においても、看護師、理学療法士、作業療法士、診療放射線技師の4職種は認知度が比較的高かった。小学生については、表4の結果と近い値を示していた。

3-5 本学の入学難易度のイメージ

「茨城県立医療大学に入学するのは、どれくらい難しいと思いますか」という項目に対する結果を図7に示した。なお、ここでは3-1において本学を知っ

ていると回答した調査協力者の結果のみを集計している。その結果、小学生、中学生、高校生においては、入学することが「難しい」と認知している割合が多いことが示された。20代以上においては、「やや難しい」と回答した割合が最も多かった。中学生を除けば、「簡単」および「やや簡単」と回答した割合は僅かであった。

3-6 本学の授業料のイメージ

一般に医療系大学の授業料は高いと考えられていることが多いが、本学は公立大学であるため授業料は低く抑えられている(平成30年度の授業料は535,800円)。しかし、その情報を正確に把握している人は限定的であり、多くは漠然とした形で学費のイメージを持っているのではないかと考えられる。ここでは「茨城県立医療大学の1年間の授業料は、およそいくらくらいだと思いますか」という項目に対する結果を図8に示した。なお、この集計でも3-1において本学を知っていると回答した調査協力者の結果のみを対象としている。全体的には、「(50万円)～100万円」との回答が最も多かった。一方で、「(150万円)～200万円」との回答も、中学生、30代、40代では30%以上も認められた。また、小学生および中学生では「無料」と答えた割合が他の年代よりも多くみられた。

表5 本学の養成職種の認知度

	n	医師	看護師	保健師	助産師	理学療法士	作業療法士	診療放射線技師
小学5年	221	83.3%	71.5%	54.3%	51.1%	29.0%	17.2%	26.2%
中学2年	194	90.7%	80.9%	71.1%	69.1%	53.6%	41.2%	47.9%
高校2年	354	68.4%	82.8%	55.1%	54.2%	72.0%	60.5%	59.9%
20代	167	60.5%	56.3%	30.5%	24.6%	43.7%	35.3%	31.7%
30代	366	49.2%	51.9%	29.0%	24.9%	48.1%	38.0%	31.7%
40代	492	36.2%	48.6%	27.8%	20.9%	49.0%	36.2%	36.2%
50代	435	28.0%	44.6%	29.4%	16.6%	57.9%	41.8%	39.1%
60代	375	33.6%	40.8%	31.5%	16.8%	57.6%	44.0%	38.7%
70代	165	35.8%	49.1%	37.0%	17.6%	60.0%	38.2%	42.4%
全体	2769	49.4%	41.1%	43.7%	24.3%	54.5%	35.6%	41.9%

	n	言語聴覚士	臨床検査技師	臨床工学技士	歯科医師	歯科衛生士	歯科技工士	薬剤師
小学5年	221	12.7%	15.8%	11.3%	50.7%	34.8%	28.5%	55.2%
中学2年	194	27.8%	40.7%	33.0%	70.1%	59.8%	47.9%	71.1%
高校2年	354	29.7%	45.2%	31.6%	40.1%	35.0%	27.7%	47.2%
20代	167	23.4%	26.3%	21.6%	19.8%	18.0%	13.8%	18.6%
30代	366	25.7%	32.0%	23.0%	16.1%	17.2%	12.3%	18.9%
40代	492	24.2%	32.7%	28.7%	13.2%	13.4%	13.4%	16.7%
50代	435	26.4%	38.4%	26.2%	9.0%	10.3%	12.4%	12.4%
60代	375	28.0%	39.5%	26.9%	7.7%	13.9%	14.1%	10.7%
70代	165	22.4%	44.2%	26.1%	9.7%	15.8%	12.7%	12.7%
全体	2769	34.2%	40.9%	27.9%	20.7%	24.3%	22.6%	

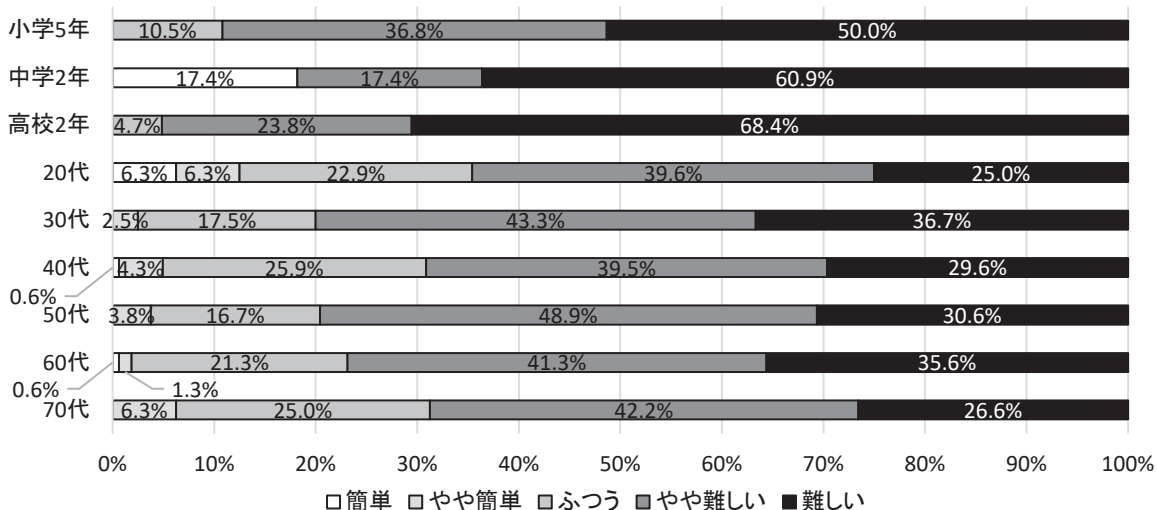


図7 本学の入学難易度のイメージ (本学認知者のみ対象)

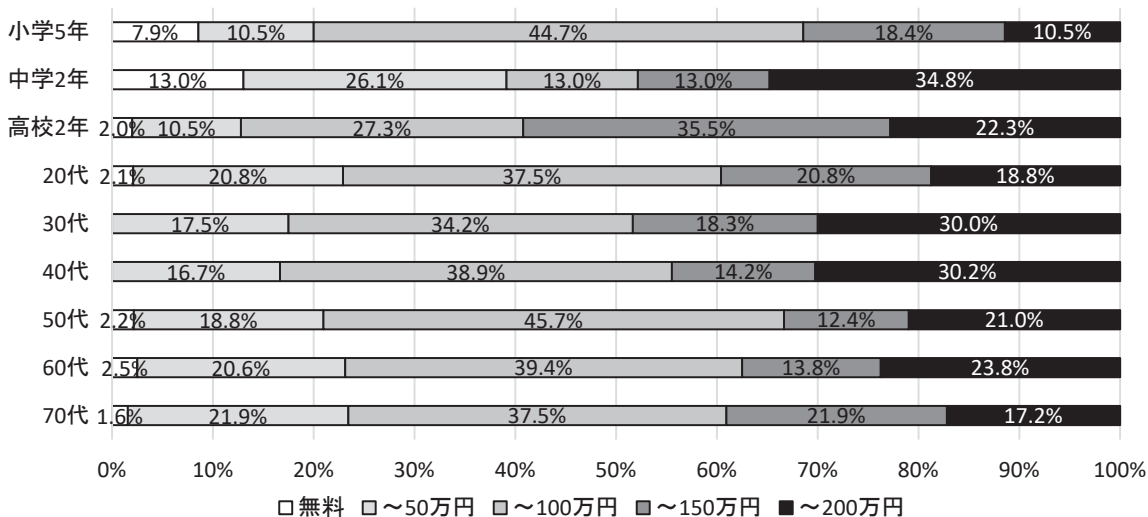


図8 本学の授業料のイメージ (本学認知者のみ対象)

4. 考察

4-1 本学の存在の認知について

本調査の結果から、本学の存在が茨城県民の過半数には知られていない可能性があることが明らかとなった。特に、茨城県内の大学として自発的に想起してもらった場合に、その傾向は顕著であった。塚本他¹⁾が中学生を対象に2013年に実施した結果では、本学から1km圏内、10km圏内にある中学校の生徒の本学の認知度はそれぞれ96%、55%であり、大学から距離があるほど認知度が低くなることが示された。本調査では、県南地域の中学校の調査協力が得られなかったため単純な比較はできないが、各学校種および年代の認知度における地域差(県南と県南以外)には一貫した傾向は見られず、必ずしも距

離に近いほど認知度が高くなるわけではなかった。もちろん大学が立地する地域と認知度との間に一定の関連はあるものと考えられるが、同じく県南地域に立地する筑波大学は県南以外の地域でも認知度が高く、情報発信力など他の要因が大きく作用していることが推察される。

4-2 付属病院の認知について

本学のある阿見町周辺は、本学付属病院の他に、東京医科大学茨城医療センターや国立病院機構霞ヶ浦医療センターが立地し、県内でも医療施設が充実した地域と言える。本学付属病院は県南地域の医療の一角を支える存在となっており、県南地域ではある程度の認知度の高さが示された。特に、20代以上の成人における認知度が高かったことから、本人

や家族、知人等がリハビリテーション専門の付属病院を利用した経験などを通して知った可能性が考えられる。県南以外の地域ではそれほど高くないことや、大学案内やホームページ等で情報を得ることの多い高校生では地域差が見られないことも、その可能性を示唆している。

4-3 医療専門職種について

本調査では14種類の医療専門職に関する知識の保有率について調べ、その結果、本学で養成している職種のうち、看護師、保健師、助産師、理学療法士、診療放射線技師については、高校生以上の年代の多くが、少なくとも名前は知っていることが明らかとなった。その仕事の中身については、本学で養成している職種のうち看護師と助産師（専攻科）は半数が知っていると答えたが、それ以外は5割を下回っていた。2018年7月31日現在の茨城県保健医療指標²⁾によると、茨城県における人口10万人当たりの医療従事者数は、全国順位で看護師が44位、保健師が37位、助産師が47位、理学療法士（病院）が35位、作業療法士（病院）が36位、診療放射線技師（病院）が34位であり、本県における上記医療専門職の養成の必要性が非常に高いことは言うまでもない。これらの専門職に就くためには、その意欲はもちろんのことであるが、現実的には一定程度の理数系の学力も求められる。このことから、高校の進学先を選ぶ段階ですでに医療専門職になるためのスクリーニングが実質的になされているとも言える。しかし、上述のように看護師と助産師以外の医療専門職は、中学生段階ではその仕事内容を具体的にイメージできるほど知らないという実情がある。吉中他³⁾は、中学生及び高校生を対象に職業知識と職業関心について調査を行い、中学生や高校生はイメージできない職業を知ろうと思うことが少なく、彼らの知りたい職業の多くはイメージできる職業の中にあることを明らかにしている。つまり、認知度が低くイメージしにくい職業に児童生徒が自ら関心を向けていく可能性は低いということである。これらを踏まえて考えるならば、医療専門職種の養成においてまず必要なことは、初等中等教育と連携しながら早期から医療専門職種がどのような場所で、どのようなことをする職業なのかイメージできるような情報を提供することなのではないかと考えられる。

4-4 本学の入学難易度や授業料について

本学の入学難易度や授業料に対するイメージからは、ある程度の難易度を持ち、国立大学並みの授業料であるという現実にもっと近い選択肢への回答が最も多く、本学を知っていると回答した人の多くは本学を正しく理解している可能性が高いと考えられる。しかし、授業料については医療系大学の授業料は高いというイメージがあるためか「(150万円)～200万円」という回答も年代によっては3割を超えていた。特に、中学生・高校生の親世代に当たる40代で30%以上が本学の授業料を過度に高く認知していた。親が子どもの進路選択に与える影響の大きさを考えると、偏ったイメージから医療系大学への進学という選択肢が外されてしまうことがないように、正しい情報が広く行き渡るような情報発信が必要であると言える。

4-5 本研究の限界

本研究では県内の5地域に調査協力者を求めたが、結果的に、小学生は3地域、中学生は2地域、高校生は4地域しかデータが収集できなかった。そのため、本研究の結果を県内全般の傾向として捉えることには限界がある。今後も調査対象を拡大し、本学及び医療専門職種に対する認知度を確認していく必要がある。

5. 結論

1. 茨城県全域における本学の認知度は、高校生を除く他の学校種および年代において低かった。
2. 本学付属病院の認知度は県南地域では高く、それ以外の地域では高くなかった。
3. 本学で養成している医療専門職種のうち、看護師および助産師は仕事の内容は半数以上が知っていたが、それ以外の職種は知らない人の方が多かった。
4. 本学を知っている人の多くは、本学の入学難易度や授業料について正しく理解していたが、授業料を高く認知している人も少なくなかった。

謝辞

本研究は、平成29年度茨城県立医療大学プロジェクト研究（1757-1）の助成を受けて行われた。

文献

- 1) 塚本和己, 古家宏樹, 藤田智也, 富田和秀, 武島玲子, 桜井直美, 角正美, 小林秀行, 梅澤光政, 飯塚眞喜人. 茨城県内中学生を対象とした茨城県立医療大学および各医療専門職の認知度と職業選択に関する意識調査. 茨城県立医療大学紀要. 2015 ; 20 : 67-74
- 2) 茨城県. 茨城県保健医療指標.
https://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/koso/iji/koso/stachischics/documents/30_7_31_hokeniryoushihyo.xlsx, (参照2018-09-28).
- 3) 吉中淳, 石井徹, 下村英雄, 高網睦美, 若松養亮. 中学生・高校生の職業知識の広がりとは職業関心に関する研究. 進路指導研究. 2003 ; 1 : 1-12

Study on Recognition of the Ibaraki Prefectural University of Health Sciences in 2017

Jun Sato¹⁾, Nozomu Mandai¹⁾, Yuki Kaku²⁾, Shuichi Nakajima³⁾, Kazumi Tsukamoto⁴⁾, Michihiro Kawano⁵⁾,
Megumi Takizawa⁶⁾, Ikue Sanada⁷⁾

¹⁾ Center for Humanities and Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

²⁾ Center for Medical Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

³⁾ Department of Radiological Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

⁴⁾ Nano Surfaces Division, Bruker Japan K.K.

⁵⁾ Department of Nursing, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

⁶⁾ Department of Physical Therapy, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

⁷⁾ Department of Occupational Therapy, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Abstract

Purpose: This study was conducted to investigate the degree of recognition of the Ibaraki Prefectural University of Health Sciences (IPUHS) by students and people living in Ibaraki Prefecture.

Participants: Students attending primary, junior high, and high schools (n = 769) and adults (n = 2,000) living in Ibaraki Prefecture participated in a survey.

Methods: Participants were requested to respond to questions on recognition of IPUHS and its affiliated hospital, assessment on knowledge of medical professionals in IPUHS, estimate regarding the difficulty of entering IPUHS, and the tuition fees of IPUHS.

Conclusions: (1) The recognition of IPUHS in Ibaraki Prefecture is low, except among high school students (2) The recognition of the affiliated hospital is high in the southern area of Ibaraki Prefecture, but not in other areas. (3) The majority of participants are familiar with the work done by nurses and midwives, which are taught at IPUHS, whereas only a few participants are familiar with the contents of other medical specialties. (4) Many participants familiar with IPUHS correctly understand the difficulty of entering this school, and also knows about its tuition fees. However, some participants think that the tuition fees are higher than the actual costs.

Keywords: Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, recognition, questionnaire survey, Ibaraki residents, Medical Profession

